

<エッセイ>南アフリカで日本の宗教を教える

著者	ポルク エリザベッタ
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	156-158
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006711

南アフリカで日本の宗教を教える

エリザベッタ・ポルク

二〇一四年八月に日文研を去って二年以上たつが、良い思い出が何も消えずに残っている。一年間の研究は信じがたいほど成果が上がり濃密だった。同僚（特に担当教員となった磯前順一先生）とスタッフには心より感謝を述べたい。祇園祭の研究計画を持っていたため、その町内のひとつ白楽天町に一年間暮らし、祭礼の諸活動に参加した。そのひとつひとつを楽しんだが、そのなかには山鉾巡行に数時間、炎天下について歩くというのも含まれていた！

日文研の後に私の人生は世界の別の部分、別の半球、南アフリカに移った。その日本研究はまだ生まれたばかりである。大げさと思うかもしれないが、国全体で日本の宗教研究者はもちろん日本学の専門家は私と夫のウーゴ・デッシシカイなのだ。最近プレトリア大学で日本語コースが始まったが、それは日本関連の話題を大学レベルで教えるところだった。私はケープタウン大学で日本の宗教を紹介した最初の教員だった。そこでは（日本の）仏教、日本の宗教とメディア、仏教と女性・ジェンダー、世俗化理論について今は教えている。もちろん私の授業ではいずれも日本関連の話題を全部とはいわないが、少なくとも数回加えている。たとえば仏教についての大学院の授業では日本の仏教に焦点をあてている。

ケープタウン大学宗教学科で教え始めたとき、南アフリカに日本研究を築き始めようと考えた。これはとても挑戦的な目的だが、まだアイデアの段階である。南アフリカはBRICSの

メンバーで日本よりも中国との関係が深い。そのためもあって孔子学院を通してケープタウン大学では中国語が教えられている。大学の需要は社会経済的な現実結びついた潮流と無関係ではありえず、同国の社会／経済における日本の役割は決して大きいとは言いがたい。多くの例のうちのひとつとして観光を挙げてみよう。ケープタウンは著名な観光都市で（南半球の）夏には世界各地から訪れる観光客で文字通りぎゅうぎゅう詰めとなるが、この驚くべき自然環境を持った美麗な都市に冒険しにやってくる日本人は極めて少ない。西ケープ州地区の日本人コミュニティも小さい。だからといって学生、若者が日本や日本の文化、特に大衆文化に興味を持つのを妨げることはない。ケープタウン大学にはアニメのサークルが作られ、学生グループが週に一度集まって自分たちで日本語を学んでいるし、ケープタウン近くには私立の日本語学校がたいそう繁盛しているらしい。

誰もが知るように、南アフリカは一九九四年まで恐ろしいアパルトヘイトに苦しみ、その結果はいまでもこの「虹の国」と呼ばれる若い民主主義的な国に不公平と格差を残している。ネルソン・マンデラ（敬意をこめてマディバという愛称で呼ばれている）と彼の遺産は南アフリカ文化の主流を占めていて、若い「ボーンフリー」世代の教育が国の未来にとって根源的な役割を果たしている。「ボーンフリー」世代とはアパルトヘイトを知らない一九九四年以降に生まれた世代という意味だ。何十年もの不正が積み積もって暴力となって爆発することもあり、昨年は国中のほぼすべての大学で暴力的な抗議があった。こうした困難はあるものの、ケープタウン大学の多様な環境での教育は豊かな経験である。南アフリカには一一の公式言語があり、私の学生は最も多様な背景の出身である。そのうえ留学生もいて、私の教室は多文化的というだけでは足りないほど多彩極まりない。

学生は誰も日本語を話さないが、何人かは日本文化、特にマンガとアニメについて知っている。私が教えている日本の宗教というテーマは彼らにはまったく新鮮で、多くの学生が日本の事をもっと知りたいと願っていて、ここでの二年間に彼らの関心が高まるのを肌で感じている。南アフリカには、特にケープタウン大学には日本学科を設立する潜在力が潜んでいると思う。ここで日本関連の研究の発展と日本関連の話題を教えるのに励んでいこうと思う。これは長期計画で、挑戦は小さくない。しかし学生が日本の宗教や文化の世界を紹介してくれてありがとうと私に感謝を述べると、これがやりがいのある道だと信じていける。

（ケープタウン大学准教授）

原文…英語

翻訳…細川周平（国際日本文化研究センター教授）